

『びりっかすの神さま』を読んで

さつき学園 五年 大西 真衣

この本を選んだ訳は、「びりっかす」なのになぜ「神様」なのか不思議に思ったからです。

ある日、四年一組に転校してきた始には、なぜか「びりっかす」が見えて、びりっかすのことを知ろうとします。

そして、「ビリ」になれば「びりっかす」が見えるという事に気づき、このことをクラスの子にも教えて競争で一位を取ることのために「頑張つて」いたクラスが少しずつ変わっていく話です。

最初はクラスのみんなも、びりっかすを見たいからテストでわざと悪い点を取ったり、運動会の練習でも遅く走ったりしました。でも、そのうち本当にこれで良いのかなと考えられるようになりました。それは隣のクラスの足の遅い友達が、いつも一生懸命走っているということを知ったのがきっかけでした。

私も、この本を読みながら始たちと一緒に悩みました。いちばんになるために頑張ることとは良いことなのかな。わざと頑張らないことは正しいことなのかな。始たちと一緒に分からなくなってしまったのです。

でも、本の終わりの部分で主人公とお母さ

んの言葉を読んだとき、その疑問が少し解けた気がしました。お母さんは、始たちが運動会のリレーを「本気で走ろう」と決めてとても頑張つて走って一位になったときそのリレーを見て「お母さん感動した。頑張らないでほしいと言ったけれど、本当にうれしかった」と言いました。お母さんは、本の最初で「人に勝つことが頑張るってことなら、お母さんあなたに頑張つてほしくない」と言っていたのです。そんなお母さんの気持ちを動かしたのは何だったのでしようか。始はお母さんに「一番になるために頑張ったんじゃない本気で走ったんだ」と言いました。それを読んだとき「そうか誰も手を抜かないで本気で走って勝つたからお母さんも始もうれしかったんだなあ」と思いました。

私は学期末の漢字の五十問テストで満点を取ることを毎回目標にしています。一問も間違えないようにするには本当にたくさん練習をしないとイケません。テスト前の休み時間に練習していると「そんなの無駄だ」と声をかけられたこともあります。そうやって漢字のテストで満点を取れた時は本当にうれしかったし、一問でも間違えて満点を取れなかったときは心から悔しいと思いました。でも絶対に次もまた頑張ろうという気持ちになるの

で、これからも満点を目指して頑張るつもりです。

この本を読んで頑張るといふ事について考えさせられました。人に勝ちたい気持ちで頑張ることが私もよくあります。負けて悔しくなる時もあります。本気で頑張った結果なら良い競争をしたと思います。本気を出して頑張る価値をこの本が教えてくれました。

りんごの木を植えて く僕の物語く

庭窪小学校 六年 石川 瑛博

「人は死んでも生きつづける」ということが、この本のテーマなのだと、作者大谷美和子さんは僕に語りかけてくる。作中のみずほさんには、「僕もおじいちゃん個展に行かせてよ。それで、おじいちゃんの話聞かせてくれる?…そのとき僕の春子ばあばの話も聞いてよ」って伝えたい。

僕には今年八十歳になるおじいちゃんがいる。みずほのおじいちゃんとの共通点だ。このことが僕を作品に、すんなりと引き込んだのだと思う。僕のお父さんもお母さんも働いていて、保育園時代も小学校に入ってからもおじいちゃんの家の下校してきた。おじいちゃん一人暮らしだけれど、この家には、「春子ばあば」がいる。姿はないけれど、確かにいるんだ。帰宅すると、まずお仏壇の前に座って、「ただいま」って声をかける。夜、お父さんが迎えに来たら、「春子ばあば、おやすみなさい」って言って帰る。春子ばあばは、お母さんのお母さん。僕のおばあちゃんだ。この世を去って十三年。病名は肺がん。これも、みずほのおじいちゃんの病名と重なる。「みずほとおじいちゃん物語」は、僕の心をより一層引き込み、知ることもなかつ

たばあばの気持ちを、僕に知らせることになった。みずほのおじいちゃんが語った『たとえあした、世界が滅亡しようともきょうわたしはりんごの木を植える』ということば。未来への希望。これを目にしたとき、「そういう意味だったんだな」とまつすぐに伝わってきた。家では今でも春子ばあばの話が自然に出てくる。これは「幸せでいてほしい」というばあばの願いを皆でしっかり受け取ったからこそなのだ、思う。そう言えば、お母さんが教えてくれた。「瑛博のがんこなところはばあばにそっくり」だと。そして「弟の底抜けに明るいところはばあばそのもの」だと。「ああ、僕の中にもばあばがいるんだな」という思いで胸が一杯になった。自分の何気ない毎日は、「今、僕が受け取った命を、生きていくからこそなのだ」ということ。これを改めて考える機会をもらった気分だ。ただ一方で、こんな気持ちもあった。それは亡くなってしまった人が、残った人の心の中で生きつづけているのは「大切な人が死んでしまったことをまつすぐに受けられないようにする、優しい方法なんじゃないか」ということだ。

みずほのおじいちゃんは八十歳の誕生日を迎えた次の日に、その生涯を終えた。僕の春子ばあばも、六十二歳の誕生日の二日後にこ

の世を去ったそうだ。それは自分を産んでくれた母（僕の曾祖母）への感謝と、おじいちゃんや僕のお母さんに、自分の誕生日を祝う機会を作ってやりたいと思ったからではないかと感じた。今回「りんごの木を植えて」を読んで、はつきりとわかることと、わからないことがあった。僕はそれでもいいと思う。「死んでも生きつづける」という僕の中の自然な感覚を大切にしたいし、何より一日一日を大切にして、今を生きていきたいと思う。